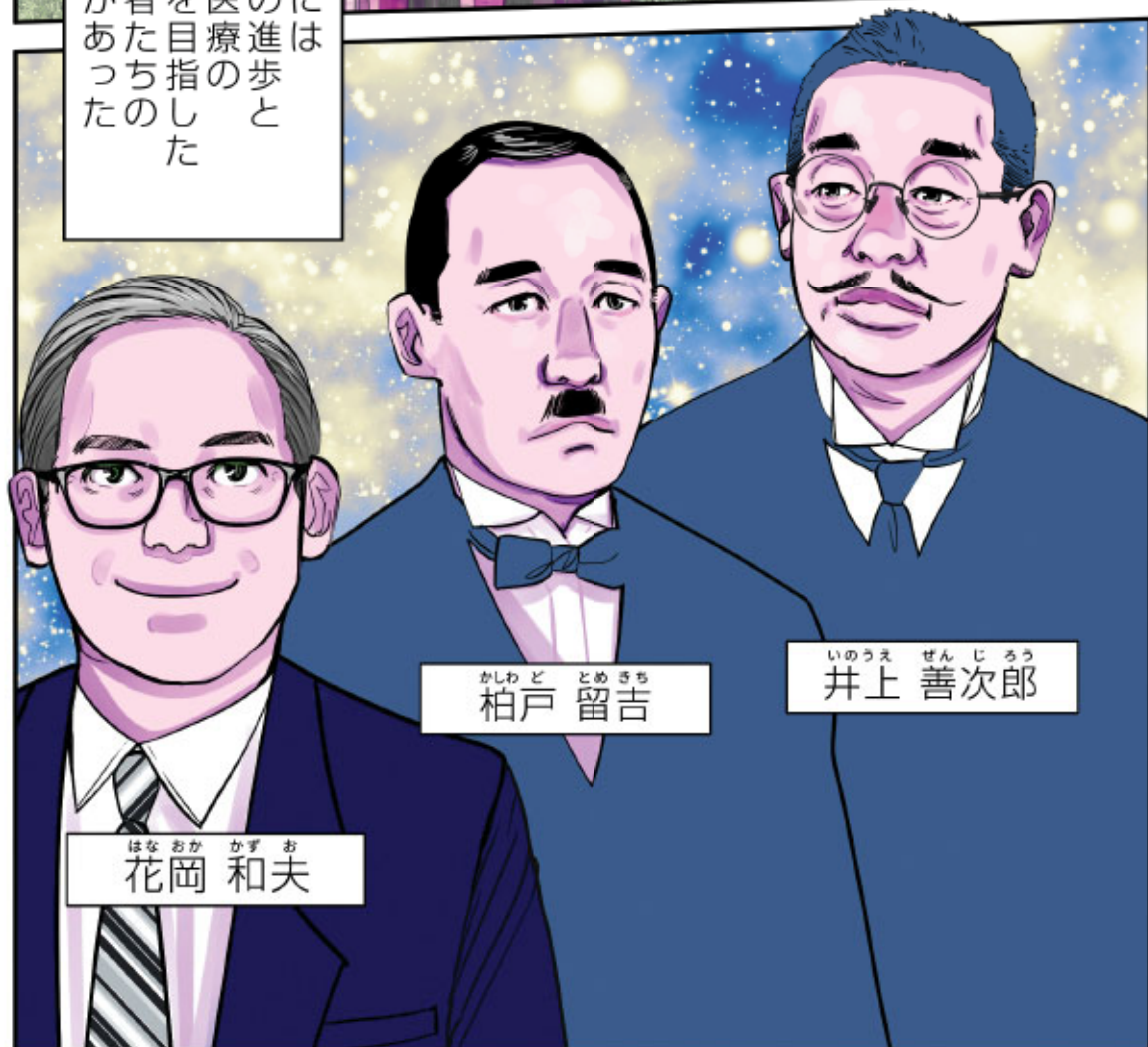


# 千葉に息づく 医の先駆者たち

作画 岡本圭一郎

明治以来  
千葉のまちには  
多くの病院や  
診療所などがあり  
「医療のまち」と  
呼ばれることもある

そこには  
医学の進歩と  
地域医療の  
発展を指した  
先駆者たちが  
存在した



はな おか かず お  
花岡 和夫

かしわ ど とめ きち  
柏戸 留吉

いのうえ せん じ ろう  
井上 善次郎

岡山県T村

先生、どうして  
この村だけに  
こんな病気が  
流行るんで  
しょうか？

すみません……  
まだ  
わかりません

ただきつと  
原因があるはず  
なんです

井上善次郎

当時ジストマ病は  
原因不明の奇病と  
されていた

あれが東京の  
帝大から来た  
先生かいな

いつまで  
続くか……

せいぜい  
頑張って  
ほしうね

村には  
ジストマ病\*  
困っている人たちが  
たくさんいる！

どうして  
患者のために  
協力できない  
んだ！

\*ジストマ病……肝臓や肺などに炎症が起こる病気。吸虫という寄生虫に寄生された淡水魚や貝などを、調理が不十分な状態で食べると感染すると言われている。



ジストマ病の  
研究は  
どこでも  
できる

研究成果を上げるほど  
上司との対立は  
エスカレートしていった

苦悩していた井上に  
手を差し伸べたのは  
千葉第一高等学校の  
校長をしていた  
長尾精一であった

まして  
千葉にだって  
困っている  
患者は大勢いる  
はずだ



この時の  
ジストマ病研究が  
認められ

1899  
(明治32)年  
医学博士となる

私が……  
博士だって

海外留学をせずに  
論文の評価だけで  
博士号を授与されたのは  
井上が初めてであった

拜啓

貴下の著述にかかる  
論文を具して  
之を文部省に提出し  
以て博士の称号を  
請求しては如何  
右御勧め申候

こうして  
井上善次郎の名は  
当時の医学界に  
知られるようになった



なかでも井上の診療は的確で患者にも学生にも好評であった

県立千葉病院は開設当初から臨床<sup>りんしょう</sup>だけでなく学び場であることを重視し多くの優秀な医師を輩<sup>はぐち</sup>出した

井上善次郎



感激だ...!

そして——



井上と柏戸が  
出会うことになる

あの有名な  
井上先生の授業を  
受けられる日が  
来るなんて...!

柏戸 留吉

—ある日—

井上先生っ！

君は…  
柏戸くん  
だったね

はい！  
柏戸留吉  
です！

わああああ  
あああ  
……！

先生が  
僕の名前を  
覚えてくだ  
さっている！

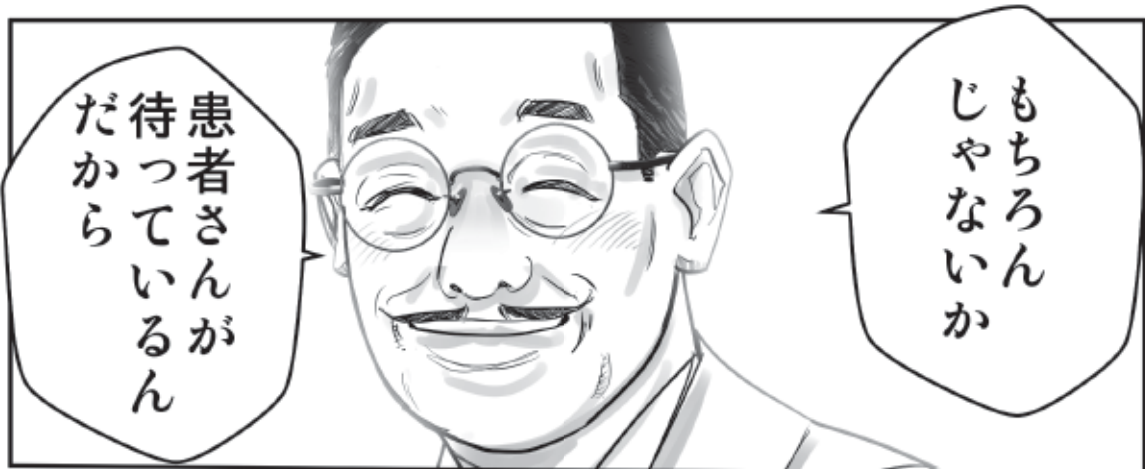
君は真面目で  
やる気満々だからね  
期待しているよ

ありがとう  
ございます！

ところで  
大きなカバンを  
持ってどちらへ  
いくのですか？

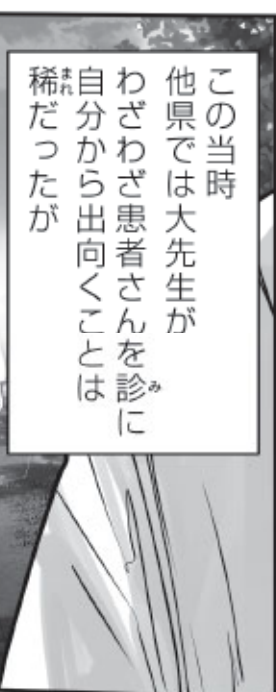
患者さんが  
隣村にいるので  
往診だよ

ええっ  
井上先生が  
直々にですか！



もちろん  
じゃないか

患者さんが  
待っている  
だから



この当時  
他県では大先生が  
わざわざ患者さんを診みに  
自分から出向くことは  
稀まれだったが



病院まで  
来られない  
患者さんのために

千葉では  
司療医長※  
であっても  
往診に出ている



患者思いの井上は  
当然のように  
自分から出向いて  
いくことを  
日課としていた

※司療医長……現在の医局長。



尊敬する  
井上先生に  
認めて  
いただきたい

そのためには  
人一倍  
勉強しないと

井上も必死に  
勉強する柏戸の努力を  
しっかりと見ていた



1週間後には  
日露戦争の最前線へと  
送られてしまう



1899(明治32)年  
千葉第一高等学校医学部を  
首席で卒業した柏戸は  
郷里の栃木で結婚するも



柏戸の生還せいかんを  
願っていた井上は  
千葉の医療向上のためには  
柏戸の力が必要だと  
県に働きかけ

戦地より  
無事に帰って  
来ることが  
できました

またよろしく  
頼むよ

県立千葉病院司療医の職を  
柏戸へ用意していたのだ



この二人によって  
千葉医学専門学校  
内科教室は

素晴らしい医療を  
提供するとともに  
強固な教育研究体制を  
確立したのであった

1916(大正5)年  
54歳の井上は  
千葉医学専門学校の教授と  
県立千葉病院  
第1内科部長の職を辞し  
後任を柏戸に託した

あとは頼むよ  
柏戸くん  
私は花岡くん  
に手伝って  
もらいながら  
市内で診療所を  
はじめるよ

「内科新書」の  
改訂も  
やらねば  
ならんしね

まだまだ未熟ですが  
精一杯頑張ります！

『井上内科新書』とは

1901(明治34)年  
ドイツ

なんてことだ…  
これがすべて  
医学書だとは…

ドイツでは  
こんな  
たくさん  
の先生の  
医学書が  
大学教授  
たちによ  
って書か  
れている  
のか…

さすが  
医学最先  
端の国  
圧倒的な  
差だ…  
日本の  
医学が  
こんな  
にも遅  
れていた  
とは…

そうだ！



私も  
これまでの  
知見を  
まとめて

こうして井上は  
帰国後さっそく  
医学書の執筆に  
とりかかった

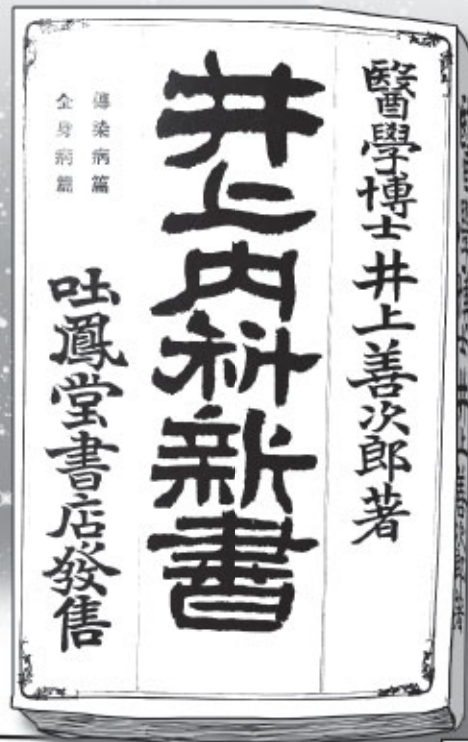
多忙を極めた  
井上だったが  
わずかな時間  
を惜しんで  
執筆にあたった

医学書に  
間違いは  
許され  
ないんだ！

こうして全4巻  
2400頁を  
超える大作  
『井上内科新書』が  
完成した

後進の若い  
医師たちの  
役に立つ  
医学書を  
まとめよう！

井上の代表作である  
井上内科新書は  
1905年の初出版以降



多くの医師や医学生の  
圧倒的な支持を得て  
80年もの間  
改定と増刷が  
繰り返された

1916(大正5)年  
井上は新田町に  
井上診療所を開設

すまないね  
花岡くん  
私に付き合わせて  
しまつて

花岡和夫

私も井上先生の  
『井上内科新書』で  
勉強していた  
一人なので

先生と  
一緒に働ける  
というのは  
本当に光栄です

一方、井上の後を  
継いだ柏戸は  
1920(大正9)年  
医学博士号を取得  
1923(大正12)年  
には再び欧州へと  
留学する

世界の医学は  
どれだけ進んで  
いるんだらう

多くのものを  
吸収して  
日本へ  
帰るぞ!

1924  
(大正13)年  
フランス

新生児に  
何を与えて  
いるんだ?

BCG  
ワクチンで  
結核を予防  
できるのか!

このBCG  
ワクチンを  
日本に持って  
帰れば

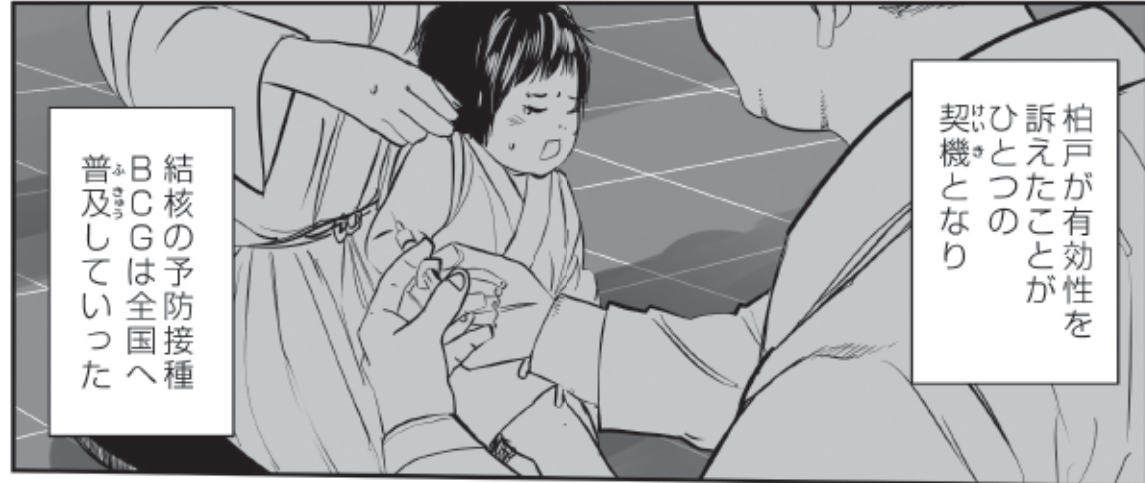
結核に苦しむ  
多くの人を  
救えるぞ!

1926  
(大正15)年

柏戸は帰国後すぐに  
BCGワクチンが  
結核予防に大きな効果が  
あることを論文で  
発表し有効性を訴えた

「ワクチン」  
B・C・Gを以てする結核予防

近世醫學改良題  
診療と治療  
第二十五卷 第二十号 第三十號  
昭和十一年十一月



柏戸が有効性を  
訴えたことが  
ひとつの  
契機となり

結核の予防接種  
BCGは全国へ  
普及していった

BCG  
ワクチンによって  
多くの命が  
救われました

お二人の活躍は  
我がことのように  
誇らしく思いました

井上先生は  
病院の医局員に  
対しても研究を  
奨励していたので

私は  
血清化学の研究に  
力を注ぐことが  
できました

井上先生の下で  
働けるのは  
医者冥利に尽きる  
幸せな時間でした

そんな時です—

1929(昭和4)年

君にこの病院を  
継いでほしい

花岡くん

わががが  
私ですか

私ももう年だ  
体も無理がきかなく  
なってきた

このままでは  
患者さんにも  
迷惑をかけてしまう

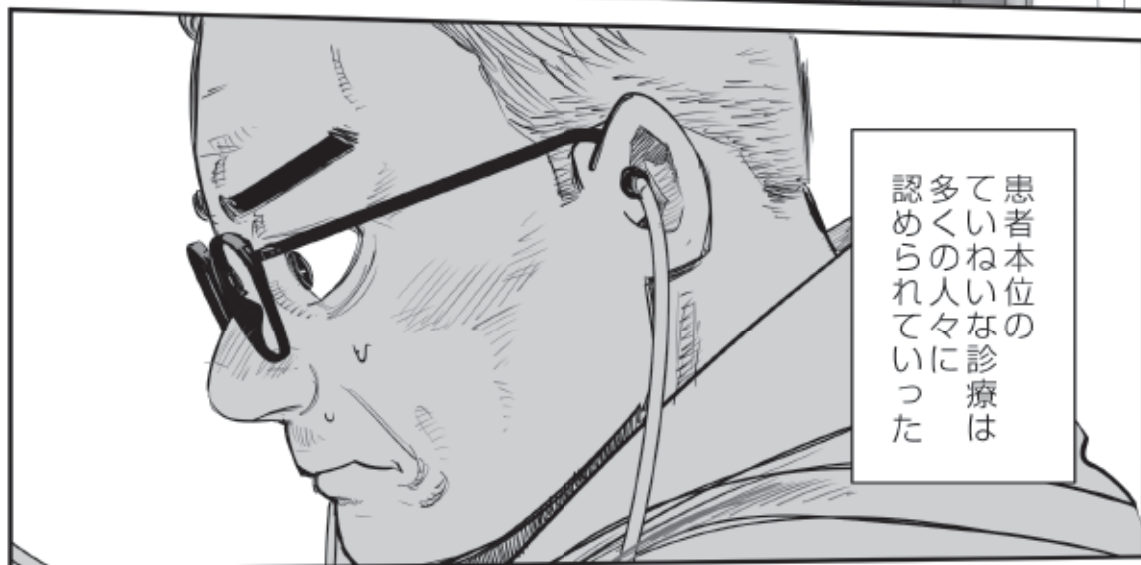
真面目で  
患者さんに  
対しても  
思いやりのある  
君にやら  
任せられる

私で大丈夫で  
しょうか

心配するな  
よろしく  
頼むよ!



花岡は  
井上の教えを受け継ぎ  
公衆衛生の大切さを  
説きつつ  
多くの人に  
喜ばれる病院を目指した



患者本位の  
ていねいな診療は  
多くの人々に  
認められていった



柏戸も  
1927(昭和2)年  
千葉医科大学を退任  
井上のように  
患者に対して家族のような  
心遣いで診療をしたいと

長洲町に  
「柏戸内科病院」<sup>※</sup>を  
開業した

柏戸病院

柏戸病院

※柏戸内科病院……後に柏戸病院へ改称。





井上先生…

柏戸先生…

時代は  
太平洋戦争へ



1941  
(昭和16)年  
4月に井上が他界  
享年79歳



同年8月  
体調を崩していた  
柏戸も後を追うように  
他界  
享年63歳



1945(昭和20)年  
6月10日の空襲により  
花岡は妻と自宅を

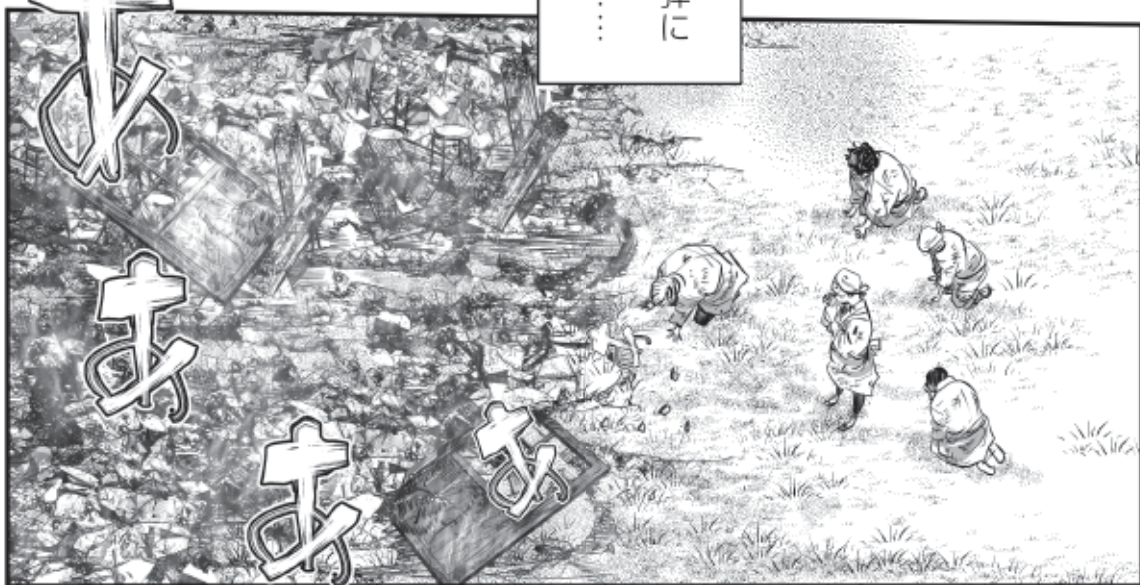
さらに  
7月7日の空襲で  
病院を失った





せつかく手当てした  
患者さんも  
罪もない  
まちの人たちも……

みんな爆弾に  
やられて  
しまった……



千葉県医師会長だった花岡は  
悲しみに浸る間もなく  
生き残った市内の医師と共に

焼け残った教育会館に  
即席で救護病院をつくり  
負傷者の診療にあたった



まだ息がある  
急いで!

こっちも  
消毒!

出血量が  
多すぎます

花岡先生  
お願いします!

手伝い  
ます

諦めるな

一人でも  
多くの命を  
救うんだっ!

すぐに行く!



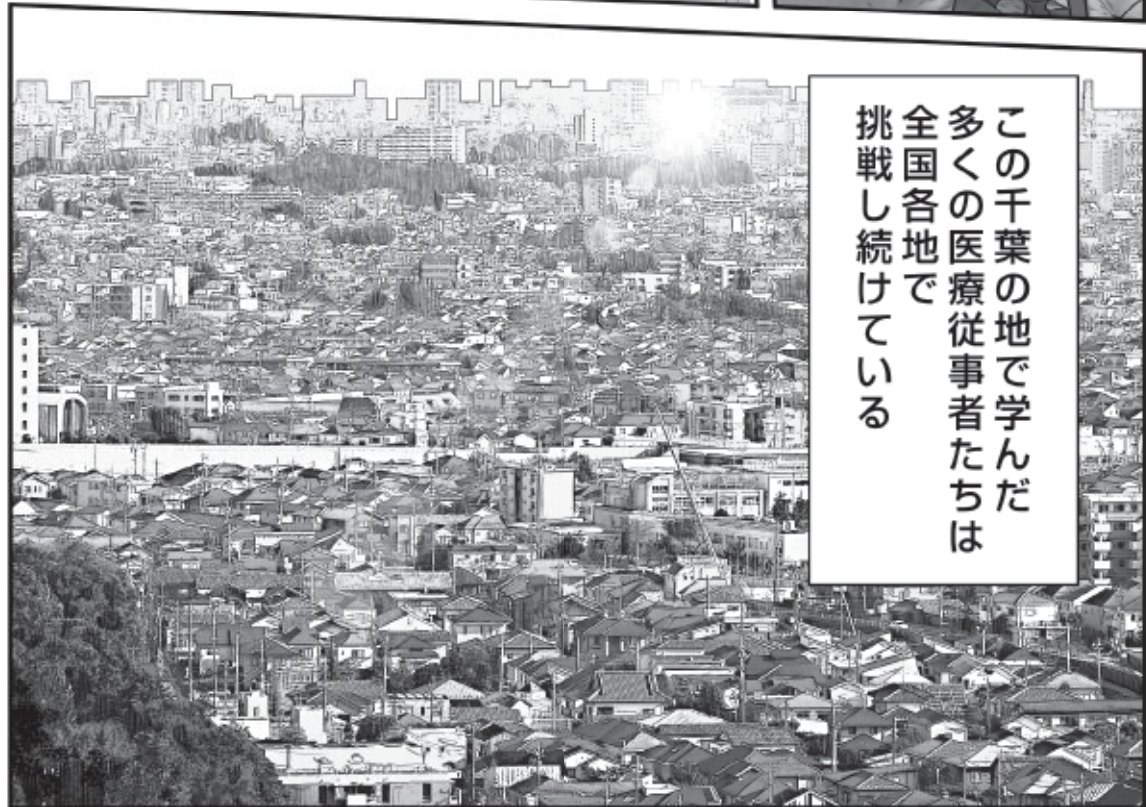
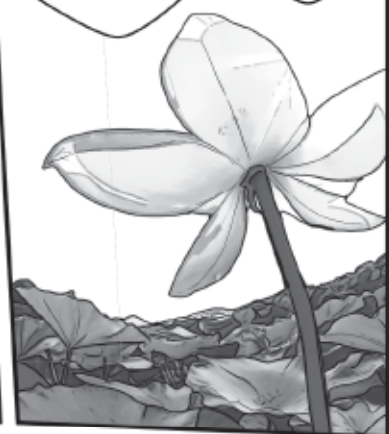
絶対に  
患者の命を  
諦めるなあ！

井上・柏戸の精神は  
花岡を通じて

志ある医者たちに  
受け継がれていった



井上と柏戸が  
まいた種は  
戦災を  
のりこえて  
花を咲かせた



## 千葉に息づく医の先駆者たち



●公立千葉病院  
 公立病院は1876（明治9）年に県営化し、公立千葉病院となった。



●千葉医学専門学校附属病院

1923年3月30日付けで千葉医学専門学校は千葉医科大学へと昇格した。



●井上善次郎教授の実習風景

井上の患者からの信頼は絶大で、当時、外来は百数十名、新患は40名を超えることもあったという。

千葉市の西洋医学の歴史は1874（明治7）年に、三井組と千葉町の有志らによる出資によって建てられた公立病院から始まります。

1876（明治9）年には県営化し、公立千葉病院と改め医学教場を付設しました。これが現在の千葉大学医学部とその附属病院の前身です。

一方、市内には1887（明治20）年に眼科医として有名だった久城籍五郎の仁山堂病院（吾妻町）、1891（明治24）年に産婦人科の名医として知られた飛田良吉の北辰病院（本町通り）、1908（明治41）年には陸軍により設置された千葉衛戍病院（現・国立病院機構千葉医療センター）、1938（昭和13）年に伝染病予防法に基づき伝染病患者収容の目的で設立された市立葛城病院（現・市立青葉病院）など多くの病院が設置されていきます。

こうして千葉市は「医療のまち」としての特色を持つこととなりました。

●1937年に完成した千葉医科大学附属病院  
戦後は千葉大学医学部附属病院として利用されたのち、今も千葉大学医学部本館として使用されている。



●公益財団法人ちば県民保健予防財団

2003年に(財)結核予防会千葉県支部、(財)千葉県対がん協会、(財)千葉県予防衛生協会、(財)千葉県医療センターの4団体が統合して創設される。  
(写真提供：公益財団法人ちば県民保健予防財団)



●検診車による胃の集団検診 (1965年ごろ)

企業や学校などに赴くことで、受診者の負担軽減と受診率の向上につながる。  
(写真提供：公益財団法人ちば県民保健予防財団)

さらに花岡は増えつつあるがん予防の活動もスタートさせ、全国に先駆けて財団法人千葉県対がん協会を発足させました。対がん協会では正しい知識の普及や診断・治療の向上を目指した技術研修を行いました。こうした活動により千葉市の公衆衛生の水準は向上しました。

結核は産業革命以降、都市への人口集中に伴い世界中で大流行しました。日本でも明治時代から昭和20年代までは「亡国病」と恐れられ、毎年10万人以上の死者を出し、死亡原因の第一位でした。結核に対する予防と治療に情熱をかけて取り組んでいた井上善次郎の志を受け継いだ花岡和夫は、結核予防会を指揮し、集団検診の推進を図るなど結核予防に力を注ぎました。